昭和二十八年六月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈光

(通第五十一号)

目次

自己発見の道……花田正夫…(1)
大無量壽経講話……福島政雄…(5)
聞信録断片……聚墨生…(12)

第五卷　第六號

自己發見の道

花田正夫

三千年の昔、ギリシヤの一角アテネの国に生れた哲人ソクテラスは「汝自身を知れ」といふ一句を神言であると掲げて、自からは「真知は無知なり」即ち、自分は何一つとして知つてゐない人間である、無知者であると告白して居ります。

同時代に出世された釈尊は「鏡は鏡自身を写すことは出来ず、刀は刀自身を切ることが出來ないやうに、自分は自分自身を知ることが出来ない。如何なる知慧者と雖も身辺三尺は暗闇である」と教へられて居ります。

両聖人の教によつて、我身を省みます時、自己の真相を発見することの大切さはよく解るのであるますが、さてそれではどうしたらそのことが実行出来るかとなりますと、釈尊の仰せ通りに不可能といふ外になくなるのであります。

唯一つの可能な道は、完全圓満な鏡に自分の姿を写すといふことであります。佛陀の智慧を大圓明鏡と申しますが、この佛の智慧に照し出される、そこに自己の真相を知ることが出来るのであります。

道綽禪師の自照

前号で道綽禪師が、曇鸞大師の碑文を通じて、自己の真相に徴せられて、念佛三昧に入られたことを申述べました即ち大師が「愚な牛はそのまま放し飼ひをされると帰る路を忘れ、危い場所に迷ひ込んで了ふ。斯うした者のたすかる道は樹につながれまぐさを頂く外にない」といふ一句が禪師の身に泌み透つたのであります。

自分如き小子は、淨土真実の慈悲につながれて、念佛のまぐさを頂く外にたすかる道は絶えてなかつたと深く自照せられたのであります。

善道大師の自照

道綽禪師の会下に参じ、ひたすら念佛の一法に乗托せられた善導大師は「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに沒し、つねに流転して、出離の縁あることなし」と深信してゐられる。深信といふのは解信ではありません。解信といふのは自分に理解するだけ信ずるといふ信じ振りであります。これでは自分以上のもの、自分で理解出来ぬことは信じられません。深信とは自分には知る力がなくても確かな人の言葉であればそれをむづと信ずる、といふことであります。さうですから「自身は現に罪悪生死の凡夫であり、それは遠い昔からの姿であり、これからはてしもなく続く流転の姿である」といふ佛語を深信せられて居るのであります。その佛語の中に自己の姿を見出されてゐるのであります。

善導大師の斯様な自照は、もとより観無量寿経の愚痴の凡夫、韋提希夫人の上に大師が自己を発見せられてゐるからであります。大師の観無量寿経の解釈の中心点は、「韋提希夫人は実際の凡夫である。この煩悩具足の凡夫の夫人が、極善最上の淨土に往生出来ればこそ善導も救はれ得るのである。」といふことであります。親鸞聖人がこの点を特に「善導独り佛の正意を明らかにし給ふ」と随喜讃仰せられて居るのであります。

さうでありますから「自身は現に罪悪生死の凡夫云々」の大師の自照は、大師の御力、大師の御智慧で見出されたのではありません、すでに佛陀の大圓明鏡の智慧のひかりに照し出されてゐる凡夫われわれの姿であります。

法照上人の自照

道綽、善導、法然の三祖は、観経を中心に佛意を深く頂かれた方々であります。その法然上人の観経の釈を読ませて頂きますと、観経の最後に近く、十悪、破戒、五逆の凡夫悪人の救済せられるところがありますが、その下品の救済のところで

「この品、もつとも要なり。すこぶる我等が分際に相当せり。

時は末法の運なり。道俗ともに正信ある者はまれなり。一昼夜の間に、八億四千のおもひあり、念々にみなこれ山途のたねなり。身口の諸業またいくばくぞや。本願名号の不可思議力に非ざるより、何を以てか彼国に往生することを得んや」

と解釈せられてあります。一切経を五遍も読破せられた法然上人が、十悪の凡夫、慚愧することさへ出来ない罪人の上に自己の姿を見出されて、「この品最要なり、すこぶる我等の分際に相当せり」と御自照せられて居ります。そして終生御自らを「十悪の法然房」と名告られて居られる

のであります。それも上人の御智慧によつて見出されたのではなく、鏡に向つて自己の面像を写す如くに、観経の鏡に映る自己の真姿の発見であります。そして八十御入滅の日まで、自分は如何にも十悪の凡愚である、そこから微塵も動きのとれない身であるといよいよ明らかに自照せられて「本願の名号の不思議力に非ざるより、何をもつてか彼国に往生することを得んや」と、この三世に渡つて浮ぶ瀬のない罪業の身にこそ本願の真実、名号の大悲のましますことをいよいよ慚謝せられて居るのであります。

親鸞聖人の自照

愚禿の二字こそ聖人御自照の至極でありませう。「愚」の一字の中に「愚痴の女、章提希われなり」のひびきがあり、「禿」の一字の中に「五逆の罪人、阿闍世われなり」のひびきがみちて居ります。

そしてこの内容こそ「愚禿悲歎述懐」であります。

浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし。虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし。外儀のすがたはひとごとに、賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽おほきゆへ、奸詐ももはし身にみてり。悪性さらにやめ難し、こころは蛇蝎の如くなり、修善も雑毒なるゆへに、虚仮の行とぞなづけたる。

無慚無愧のこの身にて、まことのこころはなけれども、弥陀廻向の御名なれば、功徳は十方にみちたまふ。小慈小悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ、如来の願船いまさずば苦海をいかでか渡るべき。蛇蝎奸詐のこころにて、自力修善はかなふまじ、如来の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん。

孔夫子は「七十にして規をこえず」と申して居りますが道と人とがひとつにとけて、人即道、道即人の心境でありませう。私共には想像も及ばぬ境界でありますが、聖人は御年すでに九十にお近く、それでゐてこの悲歎述懐がありますことは、驚異の外はないのであります。御年と共に御立派な御信境に入られたのでせうかとおたづね申すと、それどころではない、年と共に我身の腐敗しきつた、心の底まで駄目な身が自照せられるばかりである。さうした慚悔も如来の御廻向の御たまものである。ひとすぢに佛願の御催によるのである。と答へられるのであります。名月の皎々と輝くのを仰いで「美しいなあお月さんは！」と呼びかけるとき、若し月がものの云へる人であれば「御冗談でせう、私は微塵の光のない真暗い存在です。あなたの目に綺麗に見えるのは、皆太陽の反射ですよ」と、無限の光源である太陽を指されるでありませう、それが聖人の真姿であ

ります。

何といふすつきりとした、何と云ふたしかな聖人の御述懐でありませうか。信仰とは我身の立派になることではありません。いよいよ虚仮不実の身を照し出されてその駄目な全体を佛の大悲におさめとられて参ることであります。

釈迦仏の自照

以上は道綽、善導、法然、親鸞の聖人方の自照のお姿でありますが、その根本には釈尊御自身の自照があるのであります。

これは佛のさとりの境界を説かれてあります華厳経に明らかに述べられてゐるのであります。即ち、佛のおさとりとは御自身が完成して了はれることではなく、いよいよこれからだといふ自己が照し出されるのだと福島先生も申して居られますが、華厳経の入法界品の善財童子の求道物語の始めにそのことが明らかに説かれてゐるのであります。

佛の智慧を、代表せられる文殊菩薩の前に進み出られた善財童子は

「自分は憍慢の柵をめぐらし、迷ひの城に住み、愛欲の濠を作り、悪魔が心の主人となり、三毒の煩悩は熾んに燃え、愚痴の雲に覆はれた真暗の心で居ります。どうか斯る哀れの身を大慈悲の御心をもておさめ救ひ、導いて下されて真実の佛道を感ずる身にさせて下さい。」

と表白し、それから文殊の智慧の光に背後から常に照らされ護られて、五十三の善知識をたづね、遂に西方弥陀の浄土に帰られるといふ風に説かれてあります。

釈尊が卅五才の御時、菩提樹下でさとりをひらかれた趣は以上の様なものでありまして、自分はもうさとつた、立派な人間になつたといふ風なところは見られないので、むしろ自分のあさましい全体が照し出されて、いよいよ真実の求道が始る、今迄の求道は真の意味の求道ではなく、唯迷ひあるいたにすぎない、これからである！、かういふところに永遠の求道のひかりが輝やくのであります。

法蔵比丘の自照

世自在王佛の御説法をきかれた法蔵比丘は、佛前に詣りうやうやしく佛を礼し奉ると共に、その佛徳を歎じて光顔巍々として威神極みなくましまします。斯くの如きの焔明、共にひとしきものなし。日月、摩尼珠光の焔曜も、皆悉く穏蔽せられて、なほし聚墨の如し。如来の容顔は世に超え給ひてともがらなし、正覚の大音は十方に響流す。云々。

と申されてあります。王佛のひかりかがやく御かんばせの前に、日とは智慧、月とは慈悲、摩尼宝珠とは徳光でありませう。さうしたひかりといふ光が皆そのかげを沒して墨のかたまりのやうである。これは、法藏比丘の高才勇哲の智慧の力も一人升量の意志の力も皆、佛徳の大光明に照されて、その光力を奪ひ去られてゐる姿であります。「聚墨」とは法藏比丘御自身の自照の姿であります。

その後、世自在王佛の御前に進み、十方淨土を見せて頂き度いと比丘が申し上げるとき、「汝当自知」お前自身によく知つてゐるのであらうと佛が告げ玉ふと「非我境界」私の境界ではありませぬ。どうか教を垂れて下さいませとお願ひ申されるのであります。これも自己が聚墨の如しと自照せられる法藏比丘の自然な表白であります。さういふところに、真実の淨土は建立せられるのであります。

この法藏比丘の光照をうけて、釈迦佛を初めとし三国七祖はもとよりのこと、おのがじし自己発見の道がひらかれ淨土返照の不滅のひかりがかがやくのであります。

大無量壽經講話（二回）

福島政雄

今日は第二回目であります。この前は大経の初めのところで、釈尊の説法を聞きに集られた菩薩方の徳についてざつと申上げました。その時申し上げましたことは、大経の会座では、法をお説きになる釈尊が、釈尊の御法を聞きに集られた菩薩方と同じ位にあるといふことでありました。釈尊はさう云ふ心持で御法を説かれてゐるのであります。それを説聽同位と申されて居ります。説かれる方も、聞かれる方々も同位であると、釈尊が御心に感じて説いてゐられるのであります。さうだといたしますと、私共の立場はどうでせうか、甚だ恐縮ながら釈尊は私共をも、説聽同位にあるものとしての御説法であります。

ところが、今日は「その時、世尊、諸根悅予し、姿色清淨にして、光顏巍巍たり」と云ふところからお話を申します。さて「光顏巍巍たり」とありますが、私共が世俗のこ

とで、何か相談事がありまして友人のところに参る。その時、その相談を受け容れてくれるかどうかは、一目遭うて挨拶するともうわかる、これは駄目とか、聞いて貰へるかがわかる、これは私共がよく経験することであります。

佛は「その時世尊、諸根悅予し」とあります。諸根とは眼、耳、鼻、舌、身、すなはち身体の全体が悅びに満ち充ちてゐる御様子であります。しかも「姿色清淨」で、お姿がきよらかで「光顏巍巍」で、御顏はひかりかがやいて、広大な威厳があり、おごそかに見える。この釈尊の御姿や御顏はどうしたことでありませうか。

私自身に上巻が幾分心にひびいて来始めたのは五十三から五十四歳の頃であります。新京で建国大学の青年達に大経の講話を始めましたその頃から上巻の味がわかりはじめました。佛の「光顏巍巍たり」の御姿が深く印象されて参りました。

その後京都に移り住みまして滋賀県へ時々参りまして矢張り大経の御話をさせて頂きました。その頃いよいよ「光顏巍巍」たりの段が印象深く、何とも言へぬ印象を與えられました。そしてこの光顏巍巍の段に、大経の全体の御説法の内容が、この釈尊の御姿に現れている。この姿がわかると大経の全体がわかつて来るのであります。

扨て佛身に法身、報身、應身の三身があると申されます。法身とは道そのものの姿である。報身とは道が生命の姿として佛の姿であらはれ給うた姿であり、應身とは釈尊の如く歴史上の人としてさとりをひらかれた姿である。かう云ふ風に説かれてありますが、その報身佛の代表的な姿が大経の阿彌陀佛のお姿であります。その彌陀佛と釈尊はどう云ふ関係にあるかと申しますと、大経は華厳経と同じ様に、佛の三昧中の出来事、佛の三昧の御心持の中の様々な有様といふものを写し出されてゐる。釈尊の大寂定三昧の中で豊かな深い心の姿が現れて来る、その姿を写し出されてゐるのであります。彌陀佛は釈尊の最も奥深くに生きたお姿として生命となり御姿となつてゐられる。「光顏巍巍」とは釈尊の御心持の深みに、釈尊もその前に掌を合せて拜んでゐられる、そこに彌陀佛は釈尊の生命の無限の背景として、釈尊の生命に限りない深さを與へてゐられる。釈尊がそのまんま彌陀佛、彌陀佛がそのまんま釈尊となつてゐられる、それが、光顏巍巍の御姿であります。

私共衆生の立場を釈尊は、大経の会座に集る菩薩の徳の讃歎のところで、後々の衆生に到るまで、残らずこの菩薩の姿を備えてゐると説かれてゐるが、我々は苦界に居て悶々たるもの、晴れやらぬものを持つて居ります。その煩悩の生命の根本の解決を、意識の上ではいさしらず、その根本解決を求めて居り、それから抜け出たい、逃れたいと何

となしに感じて居ります。この私共に、何がその解決のさきがけになるかと申しますと、釈尊の光顔巍々の御姿を仰ぐ、その世尊の生命の光、心の光に照し徹されるといふことが、私共の悶々の状態解決の第一歩となります。そのお心がほんとうにわかり、眼に拝むと解決せられて来る、かう断言してもよい位であります。つまり私共の真暗い、煩悩の生命の底の底まで照り徹るひかりを、全身から私共に向つて光を投げかけておいでになる光景であります。この釈尊の光が私共の生命に徹つたといふことになるとそこでよいのであります。

私は御佛前で「光顔巍々」だけを称へさせられることが多い、それは釈尊が、報身佛の生命、彌陀尊の生命を限りなき生命の背景として持つて居られる、その前に帰依合掌してゐるまんまが、悶々の暗さが自然に解決せられて来るのであります。

これをこまかに言ひ現せば大経の上巻になり、悶々たる姿がそのまんま大経の下巻の五悪段に照し出されて来ます。斯様に「光顔巍々」の御姿は非常に深く有難い、何とも言へぬものであります。まあさう言ふことになると思ふのであります。

今度は釈尊の大寂定三昧の中に、阿難尊者と釈尊との問答が展開されるのであります。そこを経文には「尊者阿難佛の聖旨を承け」となつてありますが、これは釈尊は三昧に居られて何も言はれませぬが、心持が阿難にひびき、自然と阿難が立ち上る、そして佛のきよき御旨を承けて、先づ右肩の衣を脱ぎ、長跪合掌するのであります。これは印度で最も謹んだ礼の作法で、右の肩を脱ぎ、膝をつき、合掌して佛に申し上げるのであります。

「今日、世尊、諸根悦予し、姿色清淨にして、光顔巍々たること、明淨なる鏡の、影表裏に暢るが如し。威容顯曜にして超絶無量なり。未だ曾て殊妙なること、今の如くなるを瞻覩せず」

と阿難が申して居ります。即ち、明るい清らかな鏡が、表から裏まで暢るやうに見える感じを、世尊の御姿からうけると阿難が讃え申すのであります。猶ほ威容が鮮かに耀き、超絶無量で、何とも譬へやうもなく、長い間御仕へ申したが、ついぞ今日まで、斯うした妙なるお姿を拝したことがありませんと讃歎申すのであります。

「唯、しかなり。大聖、我心に念言すらく。今日世尊、奇特の法に住し、今日世雄、諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住し、今日世英、最勝の道に住し、今日天尊、如来の德を行じ給へり。

去、来、現の佛、佛々相ひ念ず、今の佛も諸佛を念じ給ふこと無きことを得んや。何が故ぞ威神光光たること、いま

ししかるや」

とあります。私はひとりでかう思ひます。と前置きして次に佛の五德を阿難が讃へるのであります。この五つの德とは、この上もなくすぐれた御法におちついて居られる。佛のさとりの位におちついてをられる、一切を導く位に住し給ひ、佛のさとりの道に心をおちつけてをられ、一切の衆生を救ふ如来の德を行じ給うて居られる。そして夫々の御德に應じて、世尊、世雄、世眼、世英、天尊とお呼び申して居ります。天尊とは天の中で一番尊い方と云ふことであります。

「去、来、現の佛、佛々相ひ念ず」とは、佛と佛が両方から相念じ合うてゐられる姿でありまして、まことに深い境界であります。人間としての立場では、自分の働きを偉く思ひ、斯く善くしたと考へますが、本当のよいことは自分が成した如く見えますけれども、実はさうではなくて、私と相手との佛佛相念による、私にひびく佛の生命と、相手にひびく佛の生命とがひびき合うて、ほんとうのことが出来てくるのであります。佛佛相念の間に、そのことが成就されたのであります。

佛佛相念とは、釈尊が一切の佛陀を御自身の中に受け容れ給ふ姿であり、また一切の菩薩、一切の衆生も受け容れ給ふのであります。極悪の衆生まで佛の境地がついにひらけると仰せられるのであります。一切の道と云ひ、一切の衆生が総て残らず、教を伝へられる人と共に広大な佛の生命の中に攝取されてゐる姿が、佛々相念の姿であります。

奈良の大佛を想ひ浮べますが、聖武天皇があの大佛をお造りになつたのであります。いよいよ成就されました時、天皇は大佛の開眼供養の式で、天皇御自身を「三宝の奴」と仰せられた宣命を大佛の前で読ませられました。德川時代の宣長とその流を汲む人々は、いまいましいことである天皇が三宝の奴と言はれるのは残念であると申して居ります。それも天皇を尊ぶ心からでありませうが深さが足らぬと思ひます。

天皇としていきた生命の上に、佛のいのちがひらめき、その佛を大佛といふ姿に象徴的に現はされて、自らを三宝の奴といはれたのは尊いことであります。即ち、佛々相念の境地を、三宝の奴といふ言葉で仰せられたのであります聖武天皇がお自ら三宝の奴と申される、向ふの佛も合掌せられて、同じことを申されるので、国学者の言ふやうなことではありません。

大佛は日本の象徴で、全体が日本を象徴してあります。先づ大佛の台坐の上にのぼると天平時代そのままの蓮弁が七つあります。その上に佛の坐像があり、二十五段の横筋があつてその中に、小佛の姿と家が刻まれてあります。そ

の蓮弁の上部には、中佛の姿があります。大佛の全体が日本国の象徴であり、天皇の象徴であります。中佛が日本の国造、即ち地方長官を表はし、更に横筋で区別された家や小佛は日本の萬民を表はしてあります。即ち日本、天皇、地方長官、下萬民を象徴されたのが大佛のお姿でありますするとその前に三宝の奴と仰せられるのが、御自身の象徴である佛陀に限りない生命を感じ給うて、さう仰せられたので、そのまま佛々相念の姿であり、こんなに仰せられるのが尊いことであります。三宝の奴とは深みのある尊い言葉であります。

私は大経の「佛々相念」のところを繰り返しますと種々の感じを想ひおこします。今一つ大事なことを申し加へませう。「佛々相念」とは、釈尊が彌陀佛の生命を自分の背景として、御自身が帰依遊されるところから、一切の菩薩や衆生を自分の中に取り容れ、攝受しておいでになる御姿であります。

浄土教では彌陀一佛と申しますが、これが基督教の唯一の神とは違ふのであります。基督教の唯一神とは、猶太教から転じて深くなつたもので、猶太教当時の神の趣が、何処かに基督教の神々に残つて居ります。猶太教の神はねたみの神と言はれてゐる、自分以外を礼してはならぬ、外に行つてはならぬと表はされて居ります。基督教の唯一神の何処かに其臭気が残つてゐます。さうでありますから唯一神を信ぜよといふには他の一切を排するやうになります。

浄土教で彌陀一佛を信ずると申す中に、一切の佛や菩薩など、あらゆる生命が一佛におさめられて居りますから、一佛に帰依することが、他佛、他菩薩を排するのではなく一切の諸佛や諸神を攝められた一佛を帰依しおがむのであります。さうでありますから、浄土教の一佛を拜するのは包容的であります、まあかう云ふことを感じるのであります。これは私の勝手な考ではなく、聖人の晩年の御手紙にもはつきりとあらはれてゐるところであります。「よろうの佛、菩薩を軽んずる、天神地祇を排するなど、夢々あるべからず」と誡められて居ります。自分が一佛のたすけにあふには、長い間、佛、菩薩、神々のお導きによるのであつて、天神地祇は私をそれまでに誘うて下された大切な方々であります。それに敬意を払ふべきで、それを我々が感ぜねばならぬとさとされて居られます。一佛のなかに、一切の諸佛方や、天地の神祇が包容されてゐると申すのであります。

それで、現在の佛も、過去の諸佛や、未来の諸佛を念じ給ふのであります。即ち一切の佛様方を念じ給ふと申すのは、今の釈尊の胸に一切それらの諸佛がおさめられてゐるのであります。釈尊は広大な胸をひらいておいでになる、

それを私は感じるのであります。

さう云ふ境地に居られる釈尊は「何が故ぞ威神の光光たる、いまししかるや」で、釈尊の不思議な御徳が、ひかりにひかつておいでになるのもさうしたことによるのでありませうか。

釈尊の御徳が巍々とかがやき、五徳に住し給うて佛々相念の三昧に居られる、そのことを驚ろき、未だかつて御見うけ申したことのない尊容であります、これは一体どうしたことでありませうかと、阿難尊者が釈尊におたづね申したのであります。すると釈尊は「阿難よ、それは諸天が来てお前に教へたのか、それとも汝自身の心持で申すのか」と阿難に問はれるのであります。

すると阿難は「諸天から教へられたのではありません、自分の心でおたづね申すのであります」とお答へ申して居ります。阿難は阿難自身の問題として、釈尊の威神のひかりかがやくわけをおたづね申しますと、釈尊は非常にお褒めになつて「善い哉、阿難は深い智慧、妙なる言葉をもつて、一切の衆生を憐れに思ふ心から、よくもこれをたづねた、非常に快い問である」と申されて、次に非常に大切をことをお説き下さるのである。

その大切なことは、釈尊の出世の本懐であります。

「如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀す。世に出興する所以は、道教を光闡し、群萌をすくひ、恵むに真実の利を以てせんとおほしてなり」

是所を教行信証の教の巻の初めに大切なこととして聖人が引用されて居ます。

無蓋の大悲とは絶対無限の大悲であります。衆生縁の慈悲を小悲と云ひ、法縁の慈悲を中悲と申しますが、佛は無縁の大悲を成就せられて居りますので大悲者であります。無蓋の大悲とはこの無縁の大悲を以て三界を哀んで下さるのであります。

三界とは欲界、色界、無色界のことであります。欲界とは我々の生活の姿で、食いたいとか、飲みたいなど種々の欲で生きてゐる世界であります。色界とは欲を離れてゐるが、姿は見える世界で、絵画や美術の世界であります。ほんたうに絵を見るには、これは何萬圓するといふ欲心で見たのでは駄目で、ただぢつと見てゐるとそれからよい感じをうける、この観賞の世界は色界であります。無色界とは、哲学、思想界で、カントやプラトンなどの住む哲学の世界であります。思想界は無色界であります。

それ等の三界を憐れみ哀しんで下さるのであります。私共が驚き、且つ非常な興味を感じますのは、佛教では美術とか哲学界も皆迷ひの世界と見られるところに、佛教の見方の徹底さがあることであります。

佛は斯る迷ひの三つの世界を憐み給うて教を明らかにして下さる、それを「道教を光闡し、群萌をすくひ、恵むに真実の利を以てせん」と仰せられるのであります。群萌とは、沢山むらがり、そこから萌え出てゐる衆生のことで、人間を中心として沢山群つて、銘々が生命の芽生えを持つてゐるのであります。「恵むに眞実の利」とありますのは真実といふ利、つまり、釈尊御自身も、永遠のまことととして阿彌陀佛をお感じになる、その何とも言へぬ有難いものそれを恵まうとして世に出られてゐるのであります。釈尊も永遠のまことを身に受けられて、共々に身にうけて行かうといふ心持で仰せられてゐるので、釈尊は私共に非常に親しい方になつてゐられるのであります。

「無量億劫にも値ひ難く見難し、なほし靈瑞華の時時にいまし出づるが如し」

出世の本懐にあふことはまことに稀であると、述べられてゐるのであります。長い年月の間にさう言ふ如来におあひ申すこともむつかしい、それはウドン華は三千年に一度といふやうに極く稀にしか華が咲かぬやうなものであるとたとへられてあります。この無量億劫にも値ひ難し見難しとは、佛の真実に出値ふ我身にしみとほるその有難さを言ひ表はされたものであります。そしてこれも釈尊自身の御心持であります、佛のまことを身にしみて有難く深く感ぜられると感ぜられるほど、これは実に稀なことであると感ぜられるのであります。

そして阿難の今問ふところは、一切の諸天人民の心をひらいて、導き利益することが甚だ多いとお褒めになるのであります。

次に

「阿難、まさに知るべし。如来の正覚は、その智はかり難く、導御する所多し。慧見無碍にして、能く遏絶するなく、一食の力を以て能く寿命を住すること、億百千劫、無数無量にしてまたこれに過ぎたり」

とあります。如來のさとりの智慧は量られぬものがあると。釈尊御自身が、阿彌陀佛に帰依しつつ仰せられる。

如来の智慧・智見は如何なるものもさまたげることが出来ない、障へ碍げることが出来ない。又一度食事をなさると、何千年、何億年の寿命が続くと仰せられてゐます。これは如来の寿命といふものは、所謂、飲み食ひでつながる佛でありません。成程、応身佛であれば飲み食ひしなければなりませんが、佛の真髄はそれを超えた無限の生命であると思います。

「諸根悅予して以て毀損せず。姿色不変にして、光顔異なること無し。所以はいかん。如来は定慧究暢して極りなく、一切の法に於て自在を得たり。阿難諦聽せよ、今汝が

為に説かん」

御身体の全体がよろこび、よろこび、どこも缺け目がなく、その姿がすこしも変らず、ひかりかがやく姿がまた変らぬ、それといふのも、佛の心を寂かにされる定の力も、智慧の働きも無限で、徹底的で、あらゆる方面に無碍自在である。

聞信錄斷片

西源寺の鐘

オームの報恩の話は、佛典を飾る美しい物語の一つであります。それは、印度にある山がありました。樹がよく繁り鳥や獣が沢山棲んで居りました。或年のこと大風が吹いて樹がすれ合うて自然発火し、山火事となりました。

焔々と燃えさかる火焔に追はれて、異様な叫び声をあげながら鳥獣は右往左往と逃げまどひました。さうした阿鼻叫喚の混乱の中にあつて、一羽のオームは身を河水に浸しては急ぎ火事場に帰り羽ばたきをしては僅かの水滴を落し又飛び去つては全身を水に浸し、その水を火事場に運んで居りました。

その氣でも狂うたやうに繰り返すオームの所作が帝釈天の眼に写りました。そこで帝釈天はオームに向つて問ひました。

「お前は山火事で氣でも狂つたのか。お前が羽ばたいて落す水滴位でこの火事がどうなるものか、どうしてさういふことを繰り返すのか」

阿難よ、あきらかによく聽け、これからそれを詳しく説くであらうと仰せになる。すると、阿難は佛に向ひ奉つて「唯然なり、願樂して聞かんと欲す」とお答へ申して居ります。即ちおねがひ、おねがひしてお聞きしたいと思ひますと申すのであります。

これから正宗分に入りますが、次号に讓ります

聚墨生記

と話しかけまでた。するとオームはすこしの時間も惜しいといふ風な様子でこたへました。

「私の運ぶ水滴位で山火事が消えるとは思ひませぬ。それでも長年の間住ませて貰ひました樹々が無残にも燒けて行くのを見ますと、水の一滴でも注いでせめても永年の御恩がへしの真似事をせずには居られません。あれ山があのやうに燒けて行きます。私は忙しいのです」

と、帝釈天に答へるのも、もどかしさうに急いで飛び去つて、再び水運びを続けました。

然し、この愚な真剣さ、オームの報恩の一念は帝釈天の心をひどく打ちました。そこで帝釈天は風をおこし雲を呼んでにはかに大雨を降して山火事をしづめて了ひました。

この説話は、佛教徒の誰でもが知る有名なものであります。

愚鈍で無能な私の心に深く泌み透るものがあります説話であります。ところが敗戦四年の春、滋賀県の近角先生の御自坊、西源寺にお詣りいたしました時、西源寺の釣鐘の出來た由來を常音先生から承り、このオームの話が、単なる説話でないと深く感銘をうけました。大略の由來を申しませう。

戦争中、各寺院の鐘が皆供出されましたが、西源寺の鐘も皆供出されて、敗戦後もそのままになつてゐました。常音先生も別に急いで造らねばならぬとも考へられずに過して居られたのであります。

ところが近角先生の御教をよく聽聞して居られた一老人が、敗戦以後、度々売り出される宝くじを小遣のある限り買ひ求められるやうになりました。家の人々も老人の慰み位に軽く考へて別に気にもとめぬと言ふ風でありました。然し何度り繰返して買はれてもちつとも宝くじはあたりませんでした、それでも根気よく何年かそれを買ひ続けて居られました。

そこで田舎のこととて、やうやくそのお爺さんの宝くじ買ひが噂に上るやうになり、一体お爺さんはどうかしたのではあるまいか、あまりに宝くじに凝り過ぎるといふ非難までが始りました。

或日のこと、お爺さんの極く懇意な、友達が來て「そんなに宝くじ買が面白いのか、村の者がどうかしてゐると蔭口を云つてゐる」と責めるやうに聞きただすと、そのお爺さんが始めて口を開いて言はれるには

「わしはな、永年の間この土地に住んで百姓をして来たが、朝に夕に、西源寺様の鐘の音を聞いてはお念佛申して来た。ところがその鐘がなくなつて、一向に鐘の音が聞けないのが淋しうてならない。さうかといつてこの老人では働いてもうけることも出来ない。そこで思ひついたのが宝

くじぢやが、一向にあたらないのだ」

と、四年の間誰にも語らないで深く心に念じつづけてゐたことを始めて打ち明けられたのであります。

それを聞いた人は「さうだつたのか、さうだつたか」といふことになり、成る程お爺さんの願ひはもつともである、といふので早速村の有志に話されたら、三日目に十二萬圓の寄附が集り、早速長浜の鑄造店に注文せられたのでありますが、その店主が事の顛末を聞きとられて申されるには「何処の寺院でも釣鐘の注文をせられるにはお祝ひの費用やら寺の修理の費用まで集めるのが普通なのに、西源寺様のやうな例は他に無い。お爺さんの志にも心打たれました。それでは早速トラックで寺まで無料でおとどけしませう」と云ふことになりバタバタと釣鐘と半鐘が数日の間とゝのへられました。

滋賀の海、湖畔に近く、朝夕に鳴り渡る西源寺の鐘の音に、お爺さんはどんなにか満足せられて、宝くじなどのことはとつくに忘れ果てて念佛申されて居ることでせう。

このお話を直々に承りました常音先生は御重病で大学病院で御養生中でありますし、私自身も心臓病で満三年静居して居りますので最近のお爺さんの消息を知ることも出來ませんが、竹生島の美と共に琵琶湖畔を飾る美しい報恩の華として末永く香り伝へられることでありませう。

然し、この実話とオームの説話こそ敗戦の日本、三千年の長い年月、私共の祖先が骨を埋め、心を残したこの日本が、メラメラと山火事の如く燃え続けてゐると感じられる人々にとつて、深く考へさせられ、強く教へられることであります。

七里和上語錄

お淨土にたしかに參れるといふ安心を得たいと云ふ人が多いが、それは方角ちがひである。お淨土へは御本願によつて參らせて下さるのであるから、本願をたのむ者が往生させて頂ける。

実際この世における事柄はまことの楽しいものではない当になるものでないと充分得心の出來たとき、ただ願ふべきは後生なり、ただ賴むべきは彌陀如來なりと、この世の花をすてたとき、初めて未來の花が得らるるのである。

造花には蝶も蜂もよりつかない。どんなにありふれた菜の花、菫の花でも、生花には香りと蜜があるから沢山の虫が集る。

編集後記

麦秋の候となりました。引き続き田植が始まるのですが、農家の方は大変お忙しい時です。

△「大経講話」の福島先生の御原稿は、大寂定に入られて居る釈尊の尊い御姿を拝し、そこに世尊は以ておられたんづで阿難尊者が驚いて、その所懐を今よろこびあね申されると上げる御姿を御出世とこのふかふかに説かれるふのこと切なとまるこまでありるとすなる尊の尊ろを容をます。阿難先生は神戸大学を辞されまして芝浦工業大学に転ぜられまして三七でありました。御住居は横須賀市船越

○重荷背負うて山坂すれど御恩思へば苦にならず　お軽詠。

○法縁にて、遠ざかるとまあ、御縁が続いてふこと云ふ経験は誰もとが目喜こがとしにいつまがきで

△「自己発見の道」は、法然上人の観経釈の上生者、十悪五逆の罪人の釈において下品の上生者、十悪五逆の罪人の救われ難き道に始まれし人の道は法然上人の弟子の弟子たる親鸞聖人の比丘尼教信の求道に始まれり、未来際をつくされる道であります。

○

△「西源寺の鐘」は御病床の近角常音先生をおしのび申し午ら、琵琶湖畔に香る念仏の華を、深く心に銘じつつ誌しました。

○

禁煙六十日になりましたが、未だ解放されず、キヤラメルにかじりつい心になれます。三十年思ふまま欲しまいて居ります。然し体力は次第に順調にかへつて居ります、御休心下さい。

聚墨生

慈光　第五巻　第五号　昭和二十八年六月十五日　発行（毎月一回十五日発行）

昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

昭和二十八年六月十日　印刷
昭和二十八年六月十五日・発行
毎月一回十五日発行

一部　十七円（郵税共）
定価　半年　百円（郵税共）
一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区瞿上町二ノ二八
編集兼発行人　花田亨夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　富田[illegible]

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区瞿上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番